

今月の谷口雅春先生のお言葉

わが子の善さを引き出すために

子供を善に導こうと思つたら

児童を本当に道徳的によき人たらしめようとするには、まず児童の人格の自由を認めてやらなければならぬのです。道徳というものは、人間の人格の自由ということが前提になって、行為の選択が自由であるところに初めて道徳的善というものが存在できるのであります。威嚇いかくや強制力によって人間がいやでも応おうでも正しき行為に強制された場合には、ルールの上の汽車のようなもので、神様という運転手がごろごろと一定のルールの上を

われわれを強制して転がして下さることになるのでありますから、脱線する恐れもないけれども、それはまっすぐにゆ行くしか仕方がないのでありますから、われわれの行為を外面から見ますと、ちょっと脱線していません、まっすぐに行っているように見えるけれども、それは自分で自由にならずに行つたのではない、自由がないからやむをえずまっすぐに走るのであります。こういう場合は人格の自由よがありませんから、行おこないは正しくとも道徳的善ではない、それはただの機械的行為にすぎないのであります。

かく考えれば、強制力によって、あるいは恐怖心によ

って、善なる行為おこないができたように見えたにしても、それは本当の善ではない、叱しかつたり罰おどしたり威おどかしたりして善なる行為ができて道徳的善ではないことになるのであります。

〔『生命の真相』頭注版第30巻82頁〕

子供の自由意志を尊重しながら

たとえばここに一本の線を引くにしましても、定規で線を引くとまっすぐに引ける。しかし、その線がまっすぐに引けなくても、これは定規が機械的に引いたのであって、人間が自由に引いた線ではないのですから、それは本当に芸術美の線であるというわけにはゆかないようなものであります。(中略)少しぐらい曲がつても手で引いた、そこに本当に人間の生命が現われて、美しい線というものができるのであります。人間の道徳的善というのもそうであって、ある人から見たらちよつとぐらい脱線しているように見えているかもしれない。レールの上を走る汽車のようにまっすぐには歩けないかもしれないけれども、われわれの行ないが、本当に自由まかに委まかされ

て、右するも左するも自由であって、しかも自由意志の発露として、道に適かなったように生活できる時に、初めて、その人が道徳的善人であるということができるのであります。

〔『生命の真相』頭注版第30巻83頁〕

強制や威嚇によって善導してはならない

ともかく、われわれは、人を導く場合に、恐怖心を起こさせるような方法によって善に導いたところが、かくして為なされる善は本当の善ではないのでありますから、人間を本当に善人たらしむることはできないのであります。恐怖心を刺激して無理に自己がなそうと思っっている悪を抑おさえますと、一見、悪が消滅したように見えますけれども、決してその悪をなそうとする衝動が消滅したのではないのであります。悪をなさんとする衝動は押し込められて窒息ちっそくしてはいますが消滅したのでありませんから、何か他の形で現われようとする傾向が自然と出てくるのであります。むろん「これをしてはならない」と威い嚇かしグツと抑おさえつけてしまいますと、一時はそれをしな

くなるかもしれないけれども、他のところからいろいろの行為に代償的に現われてくるのであります。そうなりますとせつかく人間を善くしたように見えても決して善くしていない。ひねくれ坊主をこしらえたことになるのであります。ですから強制と威嚇による児童の善導は本当に児童をよくする道ではないということになるのであります。それでは児童を善くしようと思つたならば、どうしたらいいかと申しますと、親自身が心に善を描き、行ないに善を示して、それを模倣さえすれば、児童が自発的に道德善ができるように仕向けてやるほかはないのであります。（『生命の實相』頭注版第30巻84〜85頁）

子供に宿る神性を拝む気持ちになつて

次に、子供をよくしようとするには、児童を頑是（がんぜ）ないわからず屋だと思わないで児童の神性は必ずや善を理解しようと信じて道理を説いて聞かすのが一番良いのであります。道理を説いて聞かすということは小言（こご）を言えということではないのであります。道理を説き聞かす場合

にも、こちらが興奮して棘（とげ）だつたような顔つき、語調を

して話すならば、言葉は道理を説いていても、それは叱責（せき）となり、かえつて反抗心を昂（たか）めてなんにもならないのであります。道理を説いて聞かすということは、相手の中に道理が宿（す）っていることを信じて、拝むのであります。

子供は神の子であるから「神」すなわち「真理」であるのであります。子供に宿（す）っているその道理を拝む。拝む気持ちになつて尊敬しつつ柔（な）しく道理を説いてきかさねばならない。「あなたは神の子である、善の子である、道理の子である、真理の子である、あなたの中には善があるんだから、善をなすのに極（き）まつている」と、その神性を認めてその子供を拝むような気持ちになつて、静かにその宿（す）っている道理を引き出すようにして話しかけるのであります。（中略）児童を良くするには、その神性、仏性（ぶつじょう）をまず拝むのです。拝めば扉が開かれるのです。「あなたは道理そのものである」とまず心で内部の神性を認めて拝んだら必ずそれが表面に出て、その子供が良くなつてくるのです。（『生命の實相』頭注版第30巻85〜86頁）